

巻頭言

日本女子大学教育学科
学科長 清水 睦 美

『人間研究』第61号が刊行の運びとなりました。今回号から「日本女子大学人間社会学部教育学科」による編集刊行になりました。

前号に詳細が記されておりますが、『人間研究』は、1962年発足の「日本女子大学教育学科縦の会」が1964年に「日本女子大学教育学会」に名称変更し、その学会誌として創刊されました。その後、当会は、西生田キャンパスへの移転を契機に「日本女子大学教育学科の会」へと名称変更されましたが、『人間研究』は刊行が継続されてきました。そして、2024年3月に「日本女子大学教育学科の会」は閉会となりましたが、『人間研究』は、教育学科が主体になり編集刊行を継続することになり、本日を迎えています。

「60年」と一言で行っても、社会における高等教育の意味づけには大きな変化がありましたから、出版される学術雑誌の意味づけも当然のことながら、時代ごとに違っています。現在は、雑誌の地位や声値に注目が集まり、そうした雑誌に掲載されることに拘泥する向きは強いように感じます。しかし、それによって見落とされていることもあるように思います。というのは、高等教育機関の意義や学術的価値は、必ずしも大きな声のストーリーをつくりだすことばかりにあるわけではないと思うからです。確かに私たちの社会は大きな声に支配されていますが、小さな声によって、その支配的なストーリーが問い直されたり、あるいは、その時は無視されていた小さな声が集まり大きなストーリーとして意味を持ち始めたりするからです。

そのように考えると、教育学科には、重要だと考えることを研究しまとめて掲載できる媒体が維持されているということに、とても大きな意義があるように思います。そして、『人間研究』の投稿の資格は、現在の教育学科に所属するものだけでなく、学部・大学院の卒業生、元専任教員、学科の非常勤講師と広がっており、今は「教育学科」とつながっていなくても、過去につながっていた経歴があれば、今、研究していることを発表することができるのです。

現代社会は、SNSにより、今自分の考えていることを短く発信することが、比較的簡単になってきています。しかし、短さゆえに、その考えを生み出す背景となる事柄が見えにくくなったり、間違っって伝わったりして、大きな問題を生みだしたりしています。そのような問題に触れる時、ある程度のまとまりをもって物事を考え研究してみるという姿勢は、私たちの社会において大切な態度であるように思うのです。

新たな出発点に立った『人間研究』刊行の意義をここであらためて表明しておきたいと思えます。

